

「保険のことを真剣に考える時」

エッセイスト 風間佳

先日、台風が来ている中で飛行機に乗るはめになった。
予想どおり、いや予想以上に、ずいぶん揺れた。
機内がギシギシと音をたて、フッと落ちるかと思えば、ガタガタと前後左右に揺れる。
思わず足を踏ん張り、ひじ掛けを強く握りしめる。
そんなことを何度か繰り返していると、
ふと「もし落ちたら・・・」と、そんな思いが頭をかすめた。

本当だった・・・。
何が本当だったのかと言うと、以前、こんな話をした保険会社の人間がいたのだ。
「保険は、普段何も無い時には自分には用のないもののように思えて、
どちらかというと疎まれるんですが、
いざ、病気になった、事故にあった、火事や台風にあったという時には、
何をさておいても、まっさきに保険のことが気になるものなのですよ」
その時は「まあ、そんなものだろうな」ぐらいにしか思わなかったが、彼の話は本当だった。
飛行機が揺れて「落ちたら・・・」と思った時、僕は無意識に保険のことを考えていたのだ。
「一体全部でいくらあったかなあ」「それで家族は本当にやっていけるのだろうか」とか
「もう少し入っておけば良かったかなあ」などと割と真剣に考えていたのだ。

そう言えば、以前にも保険のことを真剣に考えたことがあった。
ひどく頭が痛くて、手足がしびれて、「もしや脳腫瘍では・・・」と思った時があった。
精密検査をすることになったのだが、検査に行く前に、真剣に悩んだ。
「診査に行ったら結果が黒だったら、今後もう保険には入れないだろう。
行く前ならまだ入れるだろうから、何かに入っておいた方がいいんじゃないか」と。

「それまで元気で、掛金もつたいないからとやめた途端に、入院・手術をすることになって、
ずごくくやくして、なぜあの時、保険会社の窓口は止めてくれなかったのかと思った」
というような話は、意外とよく耳にする。私が聞いただけでも1人や2人ではない。

人間は、自分も含め、本当に現金なものだと思う。
かの保険会社の人間は続けてこう言っていた。
「保険は、何の問題もなく入れる時には入りたいと思わずに、
入りたいと思った時には入れないことが多いんですよ。
保険は勧められた時が入り時なんですよ」

・・・今日は妙に説得力をもって思い出された。

E1B-0023-hosho